氏　　名	長谷部　寿女士
学 位 の 種 類	博士（　文学　）
学 位 記 番 号	博　甲　第　９３４４　号
学位授与年月日	令和２年３月２５日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	ヴィクトリア朝イギリスにおけるファッションとテクノロジー ――ミドルクラスの衣生活と装飾意識の変容

主　　査	筑波大学	教　授	博士（文学）	山口惠里子
副　　査	筑波大学	教　授	博士（文学）	中田　元子
副　　査	筑波大学	教　授	Ph.D.	竹谷　悦子
副　　査	日本女子大学	名誉教授		佐々井　啓

論　文　の　要　旨

本論文は、19 世紀イギリスのヴィクトリア朝において、テクノロジーの進展がミドルクラス女性の衣服や服飾品ならびに衣生活に与えた影響を、女性たちのファッションへの態度や思考、衣服を自作し着るという実践のあり方を考察することによって明らかにすることを目的とする。新たなテクノロジーは、ファッションにも革新をもたらし、女性の身体観や生活習慣までも大きく変えた。本論文は、そのような変化を経験した 1840 年代から 1880 年代までのミドルクラス女性のファッションと衣生活を研究対象とし、女性に「動かない」ことを要求した装飾過多で視覚に訴えたファッションが、産業界のテクノロジーが衣服製作に応用されることによって運動を促すファッションへ、さらには快適な着心地を追求するファッションへと転化する過程を追跡するとともに、その過程に女性が日々行う裁縫のテクノロジーが関与していたことを示した。

本論文は、3 部全 7 章から構成される。第 1 部（第 1～3 章）では、製鉄技術や銅版ローラー、合成染料、ガラス等の元来はファッションとは別の分野で登場した「大きな」テクノロジーが、ファッション・スタイルに与えた影響が論じられる。第 1 章では 1840～60 年代のクリノリン・スタイルのシルエットを作った身体補正具「クリノリン」の改良過程が明らかにされる。大きく広がるスカートは約 30 年もの間流行していたが、鋼を用いた軽量性と柔軟性に富むフープ・クリノリンの製造（1865 年）は、重いドレスを身につけ「動かない」ことを美徳とした女性の身体に可動性をもたらす画期的な発明だった。第 2 章は、クリノリン・スタイルのドレスの上に羽織ったカシミア・ショールに、銅版ローラーの捺染機とジャカード織機の普及が及ぼした影響を追究した。インドのカシミールを原産とするカシミア・ショールは、イギリスのデザイン改革運動でその独特の文様が広く参照されたが、19 世紀半ばにはイギリスにおける機械製造により、模様も色彩もヨーロッパ人好みの安価な模造品が作られるようになる。安価なプリントショールの生産地として急成長したスコットランドのペイズリーは、ペイズリー模様のショールで有名になるが、その模様は元々は

インドの生命の樹をモチーフにした松傘模様を象ったものだったが、次第にフランスのデザインを模倣したものになった。そのような模造品の消費は、カシミール文化の消費も意味した。第 3 章は、ガラスのテクノロジーに注目した。1870～80 年代にはクリノリンに代わって、軽量化された鉄製の「バッスル」を用いて臀部を強調するドレスが流行した。このドレスのスタイルは、女性の歩容や動く身体を想定してデザインされた。女性たちは、街路やデパートで自らの身体をディスプレイし、都市建築に多用されたガラスに自らを映すと同時に、そのガラスに映る他者を見た。バッスル・スタイルのドレスを着用した女性たちは、このような視覚が交差する新たな視覚体験の場に身を置いたのである。ガラス税が廃止されて、大きなガラスの使用が可能となったショーウィンドウや鏡を用意したデパートは、女性の身体をディスプレイする格好の場でもあった。ミドルクラス女性のドレスの装飾は過剰になり、女性の自己意識も鋭敏化した。

第 2 部（第 4・5 章）は、服飾産業におけるテクノロジーの進展に伴うミドルクラス女性の衣生活の実態を当時の雑誌記事や広告、小説等から明らかにした。ここで着目したテクノロジーは、服飾品の製造に使用されたミシンとパターンの技術である。ミシンは工業用として発明されたが、1856 年、アメリカのシンガー社が家庭用ミシンを開発した。第 4 章は、そのシンガー社製ミシンが 1870 年代にイギリスのミドルクラス家庭に普及したプロセスを追跡し、ミシンが衣服製作のイメージと労働形態をも一新した状況を詳らかにした。シンガー社は、月賦制やレンタルシステムの導入、訪問販売、広告宣伝によりミシンを普及させたが、それによりお針子を連想させる針仕事のマイナスイメージが刷新され、快活にミシンを用いて裁縫する女性労働者やミドルクラス女性のイメージが広告や雑誌等で宣伝されるようになった。第 5 章では、ミシン産業と連動して発達したパターン産業の成立背景、および既製服産業の伸展の過程が明らかにされる。元来パターンは男性テーラーによって親方から弟子へと経験的に伝えられるものだったが、インチ単位のメジャーの登場により正確な採寸が可能になった 1830 年代に、パターン製作の方法が画一化され、既製服産業が成長した。1860 年代にはデパートや専門店でパターンが女性に販売されるようになり、ミドルクラス女性向けの雑誌にも等身大パターンが掲載され、通信販売も行われるようになった。また 1870 年代にはデパートで「半既製服」が販売されるようになる。ミドルクラス女性は、パターンとミシンという新規のテクノロジーを用いて自身で流行のバッスル・スタイルのドレスを拵え、あるいは購入した「半既製服」の装飾を自らの手でアレンジするようになった。

第 3 部（第 6・7 章）は、ミドルクラス女性たちが日々の裁縫に用いた「小さなテクノロジー」に焦点を当てるとともに、ファッションの装飾化に反して 1870 年代から始まった改良服運動の動きに着目し、反装飾的な唯美主義ドレス、テーラーメイドのドレス、および合理服のテクノロジーを考察した。第 6 章では、古代ギリシャ・ローマの衣装を範とする唯美主義ドレスが批判の対象からファッショナブルなドレスへと評価を変える過程を追究した。この転換には、M. E. ホイス夫人の手引書の出版（1870～80 年代）が大きく貢献している。ホイス夫人は、唯美主義ドレスの芸術性のみならずその有用性と経済性も強調して、質素・倹約を重んじるミドルクラス女性の生活感覚に訴えたのである。また、テキスタイルの製造で有名だったリバティ社は、婦人服部門を創設し、機械製造による価格を抑えた唯美主義ドレスを商品化した。このドレスを身につけた女性たちは、身体の形に沿ったドレスの着心地を知るようになる。第 7 章は、男性服を応用したテーラーメイドの女性服が 1870 年代末に登場した背景と、1881 年に設立された合理服協会の活動を検証した。男性のスーツスタイルから仕立てられた女性用のスポーツ服やプリンセスラインのドレスは、男性の一流テーラー、ジョン・レドファンの技術によって製作されたものだった。また、合理服協会で発案されたズボン型のディバイデッド・スカートは外衣としては批判を受けたものの下着として受容された。こうした男性服のスタイルを用いたドレスが女性の内衣と外衣に改革を起こしたのも、それらに使用された裁断のテクノロジーが「快適な」身体感覚を与えたからだった。マーガレット・オリファント夫人の小説にも描か

れたように、ミドルクラス女性もパターンを用いて「ドレスメーカー」として創造的な服を製作し、モードを生み出すデザイナーとなって自立するようになる。ここに現れる「モダンな裁縫」は、女性たちが、刺繍をし、布を縫い合わせ、装飾を縫い付ける「針」から、装飾を削ぎ落とし布地を裁つ「ハサミ」へと手にする道具を変えたことに象徴的に示される。装飾過多の視覚を重視するドレスよりも、触覚的な満足をドレスに求めるように至った感覚的変容を、女性たちは日々の衣生活のなかで経験していたのである。

以上のように、産業革命以後のイギリスで急速に進展したテクノロジーは、ミドルクラス女性のファッションや衣生活に決定的な影響を与えた。彼女たちは、日常生活において「小さなテクノロジー」を駆使した裁縫や装飾で自己を表現し身体イメージの構築も試みるなかでファッションのスタイルを変え、男性が用いるテーラーやパターンのテクノロジーを身につけ、やがて身体補正具を使用しないドレスをモードとするファッション改革を促してゆくことになる。

審　査　の　要　旨

1　批評

本論文は、19 世紀イギリスにおいて、テクノロジーがミドルクラス女性のファッションや衣生活にまで重要な影響を及ぼしたことを解明し、衣服の製作法や材料の改良、衣服の着心地や運動性の面にまで踏み込んだ画期的なファッション論を展開した。その論は、衣服の製作者でもあり着用者でもある女性の日常生活とファッションを接続し、ミドルクラス女性の装いへの熱意と自己の身体イメージを構築する欲望まで描出している。このような独創的な研究成果は、当時の衣服・服飾品、身体補正具、ミシン、パターン等の実物、アーカイヴ資料、雑誌・新聞記事、特許関連資料、文学作品、視覚的資料等の膨大な資料を渉猟し、着実に綿密に調査研究を積み重ねてきたからこそ生み出されたものである。

質疑応答では以下の点が議論された。イギリス 19 世紀のミドルクラスの階層は流動化し、それに伴いドレスの着用者層や雑誌の読者層も変化していた点を踏まえ、本論文が対象とする「ミドルクラス」がミドルクラスのなかのどの階層に属したのかについて常に意識することが記述に求められる。この意識を高めることにより、ミドルクラスが自ら発明したテクノロジー・技術により、上流階級が主導するファッション改革にどの程度の影響を与えることができたのかというミドルクラス女性の可能性と限界を問う試みにも論を進めることができる。ヴィクトリア朝社会では階層のみならず男女の役割分担も明確化されていたが、本論文は、その社会においてファッションを媒介にしてジェンダーが再編成され、セクシュアリティが大きく変容していた事実に迫る可能性をもっている。また、その事実からファッションと思想史を結んだ考察も期待される。これらの指摘はいずれも今後の研究に向けての重要な課題である。ファッションとテクノロジーを接続し、斬新なヴィクトリア朝ファッション論を展開した本論文の意義は大きく、ファッション史を、技術史、文化史、ジェンダー論、そして身体論にも位置付けた研究成果を高く評価したい。

２　最終試験

令和２年１月２９日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

３　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。